



佐藤 未雲 (さとう みくも)

スペースチャイナ代表取締役

急速な経済発展を遂げてきた中国。人々のライフスタイルの変化も著しい。多くの人が外出の足として車を使うようになり、かつての自転車大国は今や車であふれかえっている。渋滞を緩和するため、北京や上海等の大都会では、車両の通行を曜日によって奇数と偶数に分け規制をしている。

国民の生活レベルの向上に伴い、車に加え家電製品やエアコンも普及してきた。これらはいずれも大気中に熱を放出するものばかりである。都市部では人や建物、道路等の密集によって熱の分散が防げられるため、気温がどうしても上昇してしまつという現実がある。

中国では気温の最も高い都市に火炉(かまど)という別称が付けられている。最高気温35度を超える日が年に20日以上続き、かつ40度以上の高い気温の日がある酷暑の都市は大火炉と呼ばれる。

昔から有名な三大火炉に

南風

很熱!(暑い!)

南京、武漢、重慶の三つの町があるが、近代化が進むにつれてさらなる「火炉」都市が出現してきた。従来三大火炉地域に長沙、杭州、南昌、上海の4都市が加わり、新たに「七大火炉」と呼ばれるようになった。今年の暦では7月14日から三伏(さんぷく)に入っているが、三伏は一年のうちで最も暑い時期と言われる。中国には三伏の暑さを乗り切るために、绿豆粥(もろこし)、冬瓜スープ、緑茶、西瓜など消化吸収がよく、熱を下げる物を食べる習慣が古くからある。日本でも土用の丑の日につなぎを食べて暑氣払いをする風習がある。

最近の中国企業では暑さに合わせて出勤や退社の時間を調整し、昼食時の休憩時間を2時間にするなど、対策を打ち出していると聞く。

人にも地球にも優しい暑い夏を乗り切る方法はないものだろうか。それにしても今天也很熱!(今日も暑い!)である。